

養老孟司さん愛用 間伐材の眼鏡



「顕微鏡をのぞいたりするでしょ？ 野外だけでなく、室内の作業でもかなり重宝している」と話す養老孟司さん—神奈川県箱根町

「森を救う」思い形に

県内企業連携 「利益を還元」

中さんの「森を救いたい」という強い思いからだ。植林した樹木は、成長に応じて間引きしなければ、日光が当たらず地表がやせて、弱くなってしまう。風雪で折れやすくなり、やがて森が死ぬと、土砂崩れなどの災害が起き、地球温暖化を加速させる恐れもある。

ところが、間伐は進んでいない。安い輸入木材に圧倒される林業者が、経費の掛かる間伐に消極的なため

とで、スライスして断面を見るなど観察方法が広がったというのだ。

木材は木目の入り方によって強さにむらがあるため、形が複雑な物の量産には向かないとされてきた。だがプラスチックのように強度を均質化できれば、機械による加工が容易になる。福井県の主要地場産業である眼鏡なら、間伐材に高い付加価値を付けられる。

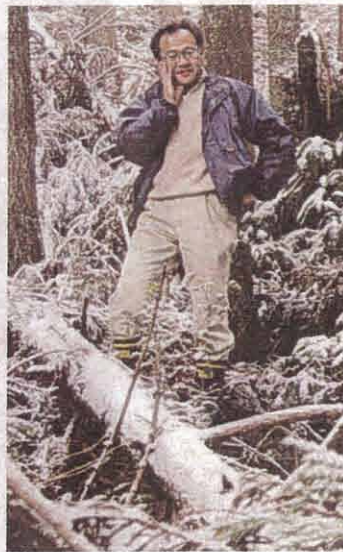
田中さんは鯖江市の眼鏡

るが、田中さんらの新製品は量産により価格を大幅に抑えられる見通し。養老さんデザインの虫の絵を刻印し、近く「養老孟司モデル」として売り出す予定だ。

「もうつけはられない。利益の一部は、森に返す。日本人の仕事の確かさと、それをほぐった自然、風土、木の文化をあらためて見つめ直したい」。新しい眼鏡には、田中さんらのそんな願いが込められている。

ベストセラー「バカの壁」で知られる解剖学者の養老孟司さんは、物の形を見るのが仕事。趣味の昆虫採集も、小さな虫をじっくりと観察することから始まる。そんな養老さんが最近、手放せない眼鏡がある。つるの部分が特殊な加工をした間伐材できている。軽くて、取り外しも楽。触れる木の温かみが実にいい。毎日使つて良さがよく分かった。全然疲れないから

越前市 田中保さん考案



倒れた樹木を前に「文明が栄え、都市化が進んだところは、どこも土地が砂漠のようになった。僕は、日本をそんな国にしたくない」と話す田中保さん—越前市

この眼鏡を考案したのは、虫捕りを通じて養老さんと交流のある田中静材木

店(越前市)社長の田中保さん。間伐材を利用したのは、父の代から木を扱う田

だ。林野庁によると、二〇〇七年三月末現在、間伐が必要なのに実施されていない山林は、全国で約三百三十万杉に上る。

「間伐材を有効利用し、利益を林業者に還元できれば、彼らの背中を押してあげられるのに」。そう考えていた田中さんは、養老さんがテレビで解剖学の標本に使う技術「プラスチック・シジョン」を解説しているのを見て、ひらめいた。死体を樹脂で硬質化させるこ



メーカーなどと提携。ヒノキの間伐材に、人体に害のないポリエステルを注入、製品化に成功した。

木製フレームは、手彫りだと十万一十五万円ほどす

樹脂を入れた木のフレームは見た目はべつ甲のような高級感があり、手で触ると木のぬくもりも